

I 経営の重点に関わること

評価段階（A：よくできている B：概ねできている、C：あまりできていない、D：できていない）

1 教育・保育目標	2 重点目標	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員から	改善策（来年度の具体的な取組目標等）
「笑顔あふれる 元気な子」	自分っていいな すてきな	子どもが「これが好き」「もっとこうしたい」の思いをもって遊んでいる	子どもが興味を持つことに保育教諭が気づき、環境を用意することで、個人差はあるがその子なりに好きな遊びや「こうしたい」という思いを持って遊ぶ姿が見られている。「もっとこうしたい」の思いがさらに出て遊びが続いたり深まったりするために、保育教諭と一緒に遊んで遊んだり、積極的に仕掛けたりすることをもう少し意識できるとよかった。	B	A	・子どもが、園内や園庭で「こうしたい」という思いをもって遊んでいる姿が随所にみられる ・飾られている作品や園庭で遊ぶ姿から、個々が思いの活動に楽しそうに取り組む姿が見られる	・好きな遊びややりたい遊びが見つけられるようになってきているので、「もっとこうしたい」がさらに出て、遊びが発展していくような手だてを、来年度の構想や計画の中に入れていく ・経験させたいことを日々の遊びの中に組みこみ、見通しをもって取り組んでいく
		子どもが安心して自分の思いを出して遊んでいる	「まだやりたい」「イヤイヤ」「できない」など様々な思いや感情を、言葉や態度などその子なりの表し方で出している。中には、主張が苦手な子や不安定な気持ちの子もいるので、思いを汲みとったり、気の合う友達と活動できるようにしたりして、思いが出しやすくなるような工夫をしてきた。	A	A		
		身体を動かす楽しさを感じながら遊んでいる	乳児組では、マルチパネやコンテナを組み合わせたリ、手作りの玩具を取り入れたりして、身体を動かして遊ぶことを楽しんできた。幼児組でも、様々な道具でサーキットを作りいろいろな身体の動きが楽しめるようにしたり、追いかけてこやサッカーなどの簡単なルールのある遊びをしたりしてきたが、運動遊びを避けてしまっている子への働きかけや、発達段階に合わせた環境作りが必要であった。	B	B		

II 各領域に関わること

大項目	中項目	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員から	改善策（来年度の具体的な取組目標等）
1 こども園における 教育及び保育	(1)0歳から小学校就学前までの一貫した教育及び保育	発達の連続性を考慮し、発達や経験の差を理解把握した上で、学年目標に向けて保育が進められている	クラス内で子どもの実態について話し合い、個々に応じた援助ができるようにしてきた。また、月の後半の会議で、各クラスの子どもの様子や月案について共有したり、日々の打ち合わせでは子どものその日の姿を話す時間を作ったりし、園の子どもたちの様子が把握できるようにした。	B	B	1-(1)・年齢に合わせた遊びや活動が子どもたちの成長を支えている。子どもの「やってみよう」を支える計画や支援ができています	・各学年が学年目標に向けた保育を意識し、会議や打ち合わせでの保育の振り返りや子どもの姿の共有をひきつづき行っていく
		(2)一日の生活の連続性及びリズムの多様性への配慮	朝の聞きとりを丁寧に行い、子どもの体調や配慮事項などについて家庭と情報交換しながら、一人ひとりに応じた食事や午睡、遊びの援助をした。登園時は特に温かい受け入れを心掛け、気持ちが落ち着くまでスキンシップをはかるなどしている。早遅番はコロナ感染予防のためなるべくクラス保育とし、子どもたちが安全に落ち着いて遊べる環境を作っている。	A	A	1-(2)・先生たちが、子どもに寄り添って子どもたちの活動を支えている	・早遅番の過ごし方や遊びの環境を今後も工夫していく
		(3)環境を通して行う教育及び保育	子どもがわくわくし、「やってみよう」「楽しい」と感じられるような環境構成がされている	登園前の環境の準備を行ってきた。早遅番の当番が入っていることが多く準備ができる日ばかりではなかったが、職員間でもう少し積極的に声をかけ合って環境づくりができるとよかった。 子どものやりたい思いを考えながら、材料や遊具などを準備したり、遊びの途中で再構成したりしてきたことで、遊びの拠点ができるようになった。	B	B	1-(3)・きれいな園舎、教室、整備された園庭、隣接する公園など、子どもたちがのびのびと生活できる教育環境と暖かく見守る人的環境が整っている ・「環境づくりがもう少し積極的にできるとよかった」とのことだが、土台となる環境は良いので、そこは改善できるのではないかと ・環境づくりは、保育者として常に考えていくこと
2 安全管理・指導	(1)事故防止・防災	様々な災害を想定した訓練に取り組み、非常時の対応を身につけている	毎月訓練を行い、その都度振り返りをする中で、職員も子どもも「こういう時にはこう動く」といった対応が身につけてきている。一人ひとりが瞬時に考えて動けるような予告なしの訓練を増やすと、より意識が高まると考えられる。また、浸水を経験し、見直すべきところがいくつか出てきたので改善できる場所はしていきたい。	A	A		・様々な災害を想定した訓練を行う中で、予告なしの訓練の回数も増やし、職員一人ひとりが考えて動くことができるようにしていく
3 保健管理・指導	(1)健康教育の充実	年齢にあった生活習慣の自立に向けて、家庭と連携を取りながら、個に合った援助をしている 食育活動を通して食への関心を高めている	生活習慣について気になることがあればまずは家庭での様子を聞き、子どもにとってより良い方法を共に考えながら援助をすすめてきた。ハンカチを持つことや、食事のマナーについての援助を意識して行ってきたが、家庭への働きかけとともに援助の工夫も必要であった。 季節の行事に合わせた食育の会を行い、食材や食べることへの関心が膨らむようにしているが、野菜の栽培をどう保育へ活かすかが課題である。	B	B		・生活習慣について、家庭への発信の仕方を工夫し、家庭とともに取り組むことができるようにする ・栽培については、保育教諭自身も日々の世話を丁寧に行ったり、見通しを持った計画を立てたりし、もっと保育に活かすことができるようにする
4 特別支援教育・保育	(1)支援体制づくりの推進	一人一人の発達や特性を理解し、生き生きと遊びや生活ができるよう、職員で共通理解し、支援している	サポートプランの作成、保護者との面談（年4回）、トーマスの会の実施など支援担当職員を中心に、一人ひとりに合った支援をしている。職員会議のケース会議で個別の様子を伝えあうようにし、園全体で知っておいてほしいことはそこで共有できるようにした。公開保育でトーマスの会を見る機会を作り、他の職員も知る機会となった。	B	B	4・保護者とともにどんな特性をもっているかを共有し、必要であれば医療につなぎ、その子に合った支援計画を作るのが大事。小学校としても、学校に上がってから継続的に支援できるようにしたい	・担当職員だけでなく子どもに関わるすべての職員で子どもの姿や支援方法について共有し、支援ができるよう、ケース会議などで話し合う機会を持つようにする
5 組織運営	(1)組織体制の充実	職員一人一人の良さ、得意を活かし、協力して教育保育を進めている	自分の分掌を責任もって行うだけでなく、他の仕事についても協力しようという意識を持ち業務を進められているが、一人ひとりがもっと発信したり園全体を巻き込んでいくよう働きかけたりすると、より協力体制が作れた。	B	B	・担当者だけでなく、複数で支援する体制を組むことが大事 ・保護者が、自分の子が他のお子さんと何か違うかもという様子を感じるには、参観会も計画的に持つ必要があると思う	・乳児、幼児の連携を今後も意識する ・分掌が発信したり指示を出したりして、園のみならずで取り組む体制を作っていく
6 研修	(1)研修体制の充実	重点目標の達成に向け、研修計画に基づいた園内研修を行っている 園外研修に積極的に参加し、個人の専門性を高めている	研究保育では、より多くの職員に参観してもらえるよう時間配分したり、ビデオ撮影したものを見せたりして、様々な職種の職員が参加できるようにした。事後研では話し合うポイントを決め、「こんなやり方もあるのではないかと」「自分だったらこうするかも」といった視点で考えを出し合い、自身の保育へ活かすことができるようにした。話し合いに参加できない職員との共有をもう少し丁寧に行えるようになった。	B	B		・引き続き、様々な立場の職員が園内研修に参加しみんなで考えることができるような研修の方法を工夫する ・話し合いに参加しなかった職員への伝達、共有を丁寧に行っていく ・来年度も、会計年度職員も園外での研修に参加する機会を作っていく
7 教育・保育環境 整備	(1)教育・保育環境の充実	毎月の安全点検やヒヤリハットの検討を行い、常に安全な環境を心掛けている	職員それぞれが、小さなことも危険につながらないよう意識したり、クラス内でも大人の立ち位置など声を掛け合ったりして保育している。ヒヤリハットやケガがあった時には、打ち合わせで報告し、気をつける点や改善点を共有した。また、定期的にヒヤリハットの集計を行い、確認し合った。 安全点検やコロナ対策の消毒も日々実施している。	B	B		・ヒヤリハットやケガの報告を日々の打ち合わせで報告し、情報共有できるようにする ・月1回の施設点検を月当番も一緒に行うようにし、職員の安全な環境への意識を高めていく
8 家庭との連携・協力	(1)家庭教育への支援機能の充実	保育教諭が進んで挨拶をする お便りやボード、ホームページなどで、園での取り組みや子どもの姿を伝える 日々の声かけから、保護者の思いを聴いている	登降園時はスムーズな引き渡しが必要のため、時間をかけたコミュニケーションはなかなか取れないが、その日の様子や少しでも伝えられるようにしている。その分、乳児組は連絡ノートで様子を伝え合い、幼児組はボードを活用している。ボードやおたよりでは写真を多めに掲載して、子どもの様子が伝わりやすいようにしているが、保護者から、おたよりのカラー写真を望む声や写真販売の要望もあり、今後検討が必要である。	A	B	8・駐車場が少ないとすぐに駐車場に戻らなくてはならず、コミュニケーションの時間が取れなくなってしまう。 ・コロナ禍で、保護者参加の行事が減り、親同士の交流も減ってしまった。早遅番もクラス保育となっているが、以前は他学年の子同士の関わりや、いろいろな先生との関わりが持った。 ・学校は、おたよりをメールでPDFで送るようになっていた。欠席連絡やアンケートなども電子化されペーパーレスになった。	・地域との関わり等について、実践していることが家庭に伝わっていない現状がある（乳児組が行っていることを幼児組の保護者が知らない等）。園だよりに掲載したり、ボードに掲示したりし、発信の仕方を工夫していく
9 近隣の学校・園との連携	(1)近隣の学校・園との連携の推進	近隣の園や小学校との公開保育や授業を通して、情報交換や交流の場を作っている	自園の研究保育に来てもらったり、他園の公開保育や小学校の公開授業に参加させてもらったりすることで、情報交換や学びの場となった。年長組が小学校へ手紙を書き、交流を楽しみにしているため、できる方法で実現させたい。また、今年度は中学3年生の授業の一環で、生徒が園に来て子どもたちと一緒に様々な遊びを楽しんだ。お互いにとって貴重な体験となった。	B	B	9・園だけでなく、近隣の園児との交流は、園児の視野を広げる意味でも有意義な活動だと思う。	・今までは、コロナ禍で交流がはかりにくい状況があったが、今後は、近隣小学校や近隣園との交流を、できそうなことから行っていく
10 地域との連携	(1)信頼される園づくりの推進	地域の様々な人との交流を通し、園ではできない経験をしている 地域の子育ての場となっている	野菜の収穫体験をさせていただき地域の皆さんを園のやきいも会に招待し交流をもつことができた。勤労感謝の訪問では、消防署や石福建設さん、園医さんなど、地域で働く方たちにカレンダーを作り感謝の気持ちを届けられた。 園庭開放日、おしゃべりサロン、一時保育など、未就園の方たちの受け入れも積極的に行なった。	B	B	10・園の外の活動は、生活経験を豊かにすることにつながるため、今後もできる範囲で行っていくのが良い。	・積極的に散歩に出かけ、地域を知る機会を増やしていく。地域の方の畑では、野菜の収穫だけでなく生長を見に行くなど、できることを行っていく